六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

岡﨑龍之祐　ファッションデザイナー、アーティスト

Ryunosuke Okazaki / Fashion Designer, Artist

CREATOR INTERVIEW No 175

岡﨑龍之祐　Ryunosuke Okazaki

広島生まれ。現在は東京を拠点にアーティスト、「RYUNOSUKEOKAZAKI」デザイナーとして活動。

NO 175

岡﨑龍之祐 ファッションデザイナー、アーティスト

RYUNOSUKE OKAZAKI / Fashion Designer, Artist

ドレス、彫刻、インスタレーション。まだ試していない表現の先に進みたい。

クリエイターインタビュー

『“祈り”の造形を街に。六本木の日常に新しい光景をつくる』

published_2026.03.04 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ shoko ema

2021年のデビュー以来、唯一無二の美を宿したドレスで多くの人を魅了し続ける岡﨑龍之祐さん。2024年にはニューヨークのメトロポリタン美術館、2025年にはロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート博物館に作品が収蔵されるなど、世界的にも高い評価を受けています。ドレスのみならず、彫刻、インスタレーションに至るまで、ファッションとアートを自在に行き来する岡﨑さんのクリエイションは、どこから生まれるのか。その根幹と、未来を見据えたビジョンに迫りました。

粘土をこねる感覚が、今のドレスづくりにつながっている。

絵を描くのが大好きで、鉛筆と画用紙さえあれば機嫌がいい子どもでした。そして、高校生のころに興味を持ったのがファッションデザイン。広島市内の高校に通っていたのですが、学校帰りに友だちと古着店に寄るのが楽しみのひとつだったんです。

古着を通して出会ったのが、コム・デ・ギャルソンやアレキサンダー・マックイーンの服。当時の僕は、それらをアートとして捉えていました。ファッションに触れるほどに、それが“芸術”を表現するためのひとつの手段であると実感し、やがて「僕もこれをやりたい」と漠然と思うようになりました。そうして、独学で服づくりを始めたんです。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

今思えば、創作の根っこは高校生時代から変わっていない気がします。服をつくることのほかに、受験生のころは粘土をこねることが楽しかった。当時僕が目指していた東京藝術大学デザイン科の入試には、立体という試験科目がありました。例えば「風」のような漠然としたキーワードがポンと与えられ、それを想起させる造形を粘土でつくるんです。設計図を描かずに、手の中で実験を繰り返しながら面白い形を見つけていく。いま制作しているドレスや彫刻も、素材が変わっただけで、その感覚の延長線上にあります。

グラフィックや彫刻も学び、ファッション表現の幅を広げていった。

大学への進学を考えたとき、ファッションにおいてもビジュアルデザインを重視していたので、東京藝術大学のデザイン科を選びました。服づくりは、ビジュアルデザインを２Ｄではなく３Ｄでやっているようなもの。服の造形を組み立てる思考プロセスは、ビジュアルデザインそのものだと思っています。

この科を選んだもうひとつの理由は、彫刻もプロダクトもグラフィックも網羅的に学べる環境だったから。ファッション表現の可能性を広げられる土壌があったんです。そして大学院にも進み、グラフィックデザインを専攻しました。

大学院では松下計先生のビジュアルコミュニケーション研究室に所属し、コラージュを通じて、色面や明度のバランスをひたすら実験する日々でした。写真をたくさん撮って印刷し、それをどう立体的に重ねるか探究する。そこで培った感覚は、今の服づくりにも活きています。また、クマ財団の奨学生に応募して採用されたことで、それまでアルバイトに充てていた時間をすべて制作に回せるようになりました。大学院の２年間は濃密な学びの期間でしたね。

クマ財団

若手クリエイターの才能を育むため、25歳以下の学生を対象とした給付型の「クリエイター奨学金」を実施している公益財団法人。馬場功淳氏（株式会社コロプラ代表取締役会長）が2016年に創設した。絵画や建築、音楽、工芸、ファッション、小説、戯曲、映画、メディアアートなど、支援対象のジャンルは幅広い。2022年から2025年まで六本木に「クマ財団ギャラリー」を開設。奨学生たちの発表の場であると同時に、多様な交流が生まれる拠点となった。
画像：六本木・クマ財団ギャラリー 岡﨑龍之祐「002 -lifelike-」展
（ギャラリーはすでにクローズしています）

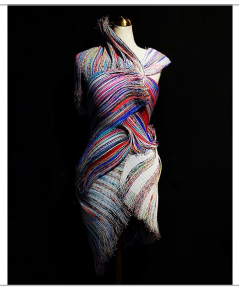
Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

つくる行為そのものが、祈りになる。

僕は広島の宮島口出身です。広島では日常に平和教育が溶け込んでいて、幼稚園の頃から被爆された方の話を聞いたり紙芝居を見たりして育ち、毎年の平和関連行事に学校で参加していました。でも東京に来てから、それが普通ではないことに気付いたんです。広島の持つ歴史に、あらためて目を向けるようになりました。

これまで僕が発表してきた作品に共通するテーマは「祈り」です。大学1、2年生のころに、平和をテーマにドレスをつくったのが始まりでした。広島市には、世界中から送られてきた折り鶴で再生紙をつくる取り組みがあります。その再生紙を譲り受け、膨大な時間をかけて手で撚って糸にし、《祈纏》という一着を編みあげました。

対岸に厳島神社が見える場所で育った経験や、自然の中に神の存在を見いだす日本人的な感覚。それらが制作の根幹にあり、糸を撚るという行為自体が、祈りに通じているのでは、と思っているんです。



祈纏

フランス発のコルベール委員会ジャパンと東京藝術大学が共同で開催していたプロジェクト「コミテコルベールアワード2018」でグランプリを受賞。《祈纏》の英題は《Wearing Prayer》。岡﨑さんいわく「平和への祈り、生きることへの祈りを体現した私の制作活動の原点とも言える作品です」。

コロナ禍では、目に見えない脅威と隣り合わせの日々を過ごしながら、生きることへの祈りについて考えていました。ふと、そんな状況が、自然の猛威を鎮めるために祈りを捧げていた縄文人の生活と重なって見えたんです。

彼らは祭事のために土器をつくり、自然への祈りをその形に込めていました。時代は変わっても、人間は自然の一部で、決してあらがうことはできない。原始の人々がものづくりに込めた念のようなものを、僕は現代で表現したい。そういう想いが、2021年9月に発表したコレクション《000》へとつながっていきました。

000

2021年9月、楽天ファッション・ウィーク東京で発表されたRYUNOSUKEOKAZAKIのデビューコレクション。縄文土器をインスピレーション源とする《JOMONJOMON》、花や昆虫を思わせる造形の《Nature's Contours》という2つのシリーズを披露した。このランウェイをきっかけに翌年、若手ファッションデザイナーの世界的なコンテスト、LVMHプライズのファイナリストに選出。フランス・パリでドレスを紹介する機会を得た。
画像：Shun Komiyama

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

published_2026.03.04 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ shoko ema

造形で惹きつけて、メッセージへと導く。

コレクションで発表しているドレスは、布というメディアを使ってはいるものの、完全に彫刻的なアプローチでつくっています。ボディに対して形を構築していくのですが、人間の関節を増やすような、新しい肢体を生み出しているような、そんな感覚です。ユーザー目線はまったくなく、体と造形の関係そのものに向き合っているんです。

そうした彫刻的なドレスが多かった中、2026年春夏コレクションの《004》では、より一般的なドレスに近い形も生まれました。ストレッチ性のある布にボーン（骨）を一本通すだけで、テントのような広がりが出る。ドレープが重力に従って表情を見せる。その趣をそのまま活かすことで、自然な美しさが表現できたと思っています。

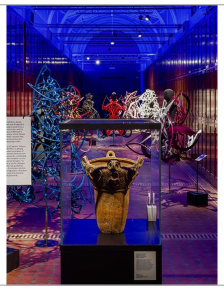
004

2025年9月に発表した、5回目となるコレクション。自然や平和への祈りというテーマは変わらず、ベロアやシアーといった素材を使い、エレガントな表情を生み出した。この《004》と同時に、完全受注生産でのバッグのコレクションも発表。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

昨年は、ロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（以下、V&A）に作品が収蔵されたことも大きな一歩でした。きっかけは、2022 年から 23 年にかけて香港の K11（ケイイレブン）という商業施設で開催された、V&A 共同主催の展覧会への参加です。これ以降、毎シーズンのコレクションのルックブックを V&A に送り続けていたら、担当者がアトリエまで見に来て、「一点つくってほしい」と声をかけてくれたんです。うれしかったですね。

V&A が所蔵する工芸品でもっとも古いのが、実は縄文土器なんです。収蔵と同時に開催された展覧会「JOMONJOMON」では、その縄文土器と僕のドレスが並べて展示されました。太古の存在と、それに影響を受けた現代の作品。時代が地続きにつながっていることを、示せたような気がしています。さらに V&A の方々は、広島まで来て映像を撮影してくれたんです。宮島や平和記念公園を訪れながら、僕個人の体験が過去と現在をどう結んでいるかを探究する内容でした。キュレーターがそこまで真剣に向き合ってくれることに、本当に感動しましたね。



JOMONJOMON

2025年9月13日から10月20日までV&Aで開催された展覧会。当時の新作7点が展示され、2025年につくられた《Life and Death》や2024年制作の《Root》《Universe》《Flowers and Insects》などが並んだ。また、当時もっとも新しい作品であった。

造形の面白さでまず惹き込み、そこからコンセプトを語った映像などを見ることで理解を深めてもらう。その順序がすごく大事だと感じています。自然や平和への祈りというメッセージを、表現を通じて伝えていくこと。それを大切にしていますし、これからも変わることはないと思います。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

published_2026.03.04 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ shoko ema

遊ぶように形をつくり、自然の色を選びとる。

ファッションデザイナーであり、アーティストでもある。今はどちらの肩書きも、自然としっくりきています。以前ファッションデザイナーとして世に出たあとに、自分の作品でそう名乗っていいのかと違和感を持ってしまい、彫刻に振り切った時期があったんです。2022年から2023年ごろは、アーティストとしての活動に軸足を置いていました。

今はドレスも彫刻も、僕の中では同じくらい意味がある。例えば、木の彫刻を仕上げた後にドレスに取りかかると、彫刻で動かしていた手の感覚がそのまま移って、ドレスを形づくる線が細くなったり複雑性が増したりする。相互に影響し合っているんです。この横断こそが、僕にとっての自然体でもあります。

彫刻をつくるときも服と同じく、デザイン画や設計図は描きません。素材をどう組み合わせたら面白い形になるか、遊びのような偶発性を求めています。色の選び方もかなり直感的で、そのときの「赤と黒にしよう」といった感覚でパッと進めてしまいます。

僕の作品は発色が強いとよく言われます。自然の中にある彩りがすごく好きなんです。昆虫や花が放つ、あの鮮やかさ。色は生命を宿しているという感覚が、作品の色づかいに結びついているのだと思います。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

PIMT

2022年から制作している彫刻シリーズ。神社仏閣の伝統技法である組木から着想を得た。木を組み上げて建物をつくる行為が、祈りにつながっていると感じ、その過程を手で再現して造形した。この写真の《PIMT》は、ヒノキにアクリル絵具で着彩している。

大きくて異質な芸術が、六本木の人々と交差していく。

上京してから、六本木にはよく足を運んでいます。自分の中では、アートとデザインを見に行く街です。学生時代も、森美術館や 21_21 DESIGN SIGHT、国立新美術館、ペロタン東京などを訪れていました。

実は大学生のころ、六本木でアルバイトをしていたので、そういう意味でも身近なんです。ただそのときは、家と勤務先の往復だけで、今みたいに落ち着いて街を眺めることはしていませんでした。大人になって改めて感じるのは、芸術が日常に点在している特異な街だということです。

六本木の魅力は、公共空間に大きな作品が存在していること。六本木ヒルズに行くといつも迎えてくれる、ルイーズ・ブルジョワの《ママン》がすごく好きなんです。大きくて異質な芸術が、街の風景として堂々と存在している。

ママン

フランス系アメリカ人のアーティスト、ルイーズ・ブルジョワによる巨大な蜘蛛の彫刻作品。高さ約10メートルのブロンズ製で、六本木ヒルズのシンボル的存在として親しまれている。作品の下に入ると見ることができるのは、腹部に抱えられた大理石の卵。《ママン》はフランス語で「お母さん」を意味し、母親への思いがモチーフとなっている。

ルイーズ・ブルジョワ 《ママン》
2002年（1999年）／ブロンズ、ステンレス、大理石
9.27 x 8.91 x 10.23(h)m

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

アートは公共的な場所に置かれ、日常の中で人々の目に留まることで、価値がより高まると考えています。美術館は、すでにアートに関心がある人が訪れる場所。一方、街なかのパブリックアートは、偶然通りかかった人やこれまでアートに触れてこなかった人の目にも入る。そうした予期せぬ出会いから、少しずつ影響を受ける人が生まれていく。アートが限られた場所から出て、社会に開かれていくこと。それが、パブリックアートの本質的な価値だと思うんです。

六本木は、その可能性を実現できる街です。東京ミッドタウンや六本木ヒルズのような商業と芸術が共存する施設があり、作品を置ける場所も豊富にある。しかも、一時的なインスタレーションをしても、人々が違和感なく受け入れてくれるので挑戦しやすい。あらゆる表現を迎える土壌がある街だと感じています。

いつか六本木で、大きなスケールの作品を発表したい。

一昨年、念願がかなって北京でインスタレーション作品を発表することができました。タイトルは《Trajectory of rebirth》。メインに使ったのは布です。自分がこれまで扱ってきた表現手法と素材に、パブリックアートとしての可能性を感じることができた機会でもありました。軽いため持ち運びが簡単ですし、設置や撤去もしやすい。何より柔らかい素材であることが、人々が行き交う空間での安心感につながっているのだと思います。

Trajectory of rebirth

2024年12月19日から2025年２月28日にザ・ペニンシュラ北京で開催された展覧会「The Path of Love and Hope」。それに伴い展示された、10メートル級のインスタレーション作品。タイトルは和訳すると「再生の軌跡」。ザ・ペニンシュラ北京のエントランスの吹き抜けに設置され、人々をホテルに迎える役目を果たした。

六本木は、東京ミッドタウンや六本木ヒルズなど、吹き抜けのある建物が多い。そういう場所に、こうした大きなインスタレーションを設置できたら面白そうだなと思っています。見慣れた都市の風景の中に、突然理解を超えた造形が現れたら、一瞬でも日常の感覚がリセットされるはずです。そういう驚きと偶然の出会いを、いろんな人に届けてみたい。

ファッションという観点からも、いつかショーもできたらいいですね。例えば、東京ミッドタウンの芝生エリアや街並みの中から、自分が手掛けたドレスが現れる。そんな光景が実現できたら、すごく魅力的だなと思います。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

published_2026.03.04 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ shoko ema

つくり、祈り、そして未知の表現を探し続ける。

つくる行為が祈りであるということは、これからも変わりません。ただ、美術館やギャラリーの外にも、どんどん作品を出していきたいと思っています。素材も場所もスケールも、まだ試していない方向へ広げていきたい。

でも、その先にどんな表現が生まれるかは、そのときどきの自分がつくりたいと思う欲求に従っているので、僕自身でもわからないんです。数年後の自分の作品がどんな姿をしているのか。本当に未知ですが、だからこそ面白さがあるのだと思います。

撮影場所：THE MODULE roppongi、クマ財団オフィス

取材を終えて ……

3月に開催されるショーの準備で忙しい中、六本木にあるクマ財団のオフィスで行われた取材。壁にかかった《PIMT-23》を鑑賞しながらお話を聞くという贅沢な時間でもありました。印象的だったのは、ファッションとアートという2つの領域を自在に横断するだけでなく、美術館の外へ、街の中へと、作品を解放していこうとする姿勢。岡﨑さんの次の「祈り」はどんな場所に現れるのでしょうか。とても楽しみにしています。（text_shoko ema）

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.